

《モンゴル文学の世界性》 『モンゴル文学』創刊によせて

芝山 豊¹

1968年10月13日付の朝日新聞は、「理解されたぞ “川端受賞に”に大喜び こぞって祝う文壇人」という見出しに続けて、文壇の作家たちはそろって、「日本文学がようやく世界に認められた」といって心から喜んだと伝えている。

同じ紙面には中村光男の「川端文学の特質」と題する文章が掲載されている。中村は、「氏の文学は日本人に独特の感性を深く—またある意味では狭い形で—追求したもので、いわゆる国際性とは無縁である」とし、受賞は、西洋人に能狂言が認められた如く、「その古典に通ずる現代性が—翻訳によっても—外国の読者を動かしたのでしょう。」と述べている。当時、日本語による文学は世界の文学（西洋の文学）と異質のものとする言説が専らで、ベケットやグラスを抑えての川端の受賞は、日本文学のユニークさの勝利と受けとられていたのである。

しかし、大江健三郎受賞を挟み、川端受賞から40年以上の歳月を経て、村上春樹のノーベル文学賞受賞の可能性がとりざたされる頃ともなると、日本文学の特異性についての認識は大きく様変わりして来る。村上春樹がノーベル賞を受賞しても、それは日本文学の特異性への評価ではなく、村上文学の世界性への評価だと受けとられるだろう。国内でしか認められない芸術作品には価値がないと、多くの日本人が思い始めている。製作前から世界市場を睨んでいる日本アニメーションと同じく、文学出版においても、世界市場での流通が求められる。いまやJ文学の横綱となった村上文学の質保証とは、即ち世界市場での競争力、世界的ポピュラリティーということになる。「何故、村上文学は世界で人気があるのか？」という問いは文学上のものであると同時に、マーケティング

¹ 清泉女学院大学人間学部心理コミュニケーション学科教授

イング上の問いでもある。この問いに対して、「父の不在」という興味深い答が提示されている。内田樹は、「村上文学には「父」が登場しない。だから村上文学は世界的になった。」何故なら、「存在するものは存在することによってすでに特殊であり、存在しないものだけが普遍的たりうる（内田樹『村上春樹にご用心』2007年、ARTES）」からだというのである。

エッセーの愉しみ方から逸脱する野暮を承知で言うのだが、この言説には、周縁的な文学に馴染んだ者に「なにかおかしい」と直感させるものがある。その直感がどこから来るのか考えてみると大事なことが見えてくる気がした。そこで、2009年、春季の日本モンゴル文学会の席上、以下のようなことを話した。

内田氏の説に触発され、試みに、現代モンゴル文学を代表する作品にどれだけ父が現れるのか、母と比較して計量化してみた。明らかに父の発現回数が少ない。そこで、モンゴルの生活世界での親子関係を古い時代の文学作品からも拾ってみた。『元朝秘史』のような伝統文学の中で、子どもたちは常に母親を中心とする集団の一員として存在している。今日のモンゴル国の社会調査の中からも、家族の中で「父の不在」が珍しくないことが明らかに読み取れる。日本語の場合でも、「家族」という語の用例の登場は19世紀からで、現在使われている家族概念は、主に、民法上の必要から生まれたものに過ぎない。モンゴル語にも「家族」を意味することばは本来なく、我々が無前提に普遍的だと思ふ親子関係の認識自体が存在しなかったことがわかる。確かに、西洋文学では、父の不在は神との関係について論じられる。モンゴルにおける天への信仰もモンゴル人にとって極めて重要な問題ではある。しかし、牧畜文化と父系重視という組み合わせは、近代の「発明された伝統」に過ぎず、地母神と天父神の対立という概念も所詮農耕的思考によるアナロジーである。モンゴル国の近代化過程では、土地所有を基盤とする生業から生まれた家族概念がソ連経由で

移入されるが、20世紀後半まで、日本の家制度のような家族の鞅帯となる「親子関係の新たな伝統」は発明されなかった。かくの如く、「父の不在」が伝統的に存在しても、モンゴル文学の世界性は保証されていない。それはモンゴル文学の世界市場価値が如実に示している。つまり、内田説のいう普遍性とは、畢竟、西洋性あるいは近代性という個別性への一致の程度に他ならない。村上文学の脱コンテクスト性は、世界的なポピュラリティーと引き換えに、日本語の世界を、コンテクスト重視の生活世界から切り離し、「普遍」の鑄型に押し込む危険を孕む。それ故、作家は、エルサレムでのスピーチで初めて自らの父について語り、『1Q84』で個別のコンテクストの再生を試みたのかもしれない。

モンゴルはかつてオルドスの諺に言うように、「みなし児を世話してやれば身内がふえる、弱った家畜を世話してやれば裕福になる」世界だった。しかし、南モンゴルでも北モンゴルでも非遊牧的思考による経済政策がモンゴルの生活世界に壊滅的な打撃を与えた。それはモンゴル人の天概念と自然観にも大きな変化をもたらし、豊なるモンゴルに「普遍としての貧困」をもたらすこととなった。モンゴルの作家たちが内田説の世界的ポピュラリティーの獲得を目指すなら、彼らは既に悲鳴をあげているモンゴルの生活世界とその文化の屍を越えてグローバルな文学への荊の道を進むことになるだろう。

予想通り仲間からは様々な反応が示されたが、再び「モンゴル文学とは何か」を考えるきっかけになれば、もって瞑すべしである。

日本の文学研究者のほとんどは、旧国文学系の研究者と西洋文学の研究者であり、ポストコロニアルの文学研究を担う研究者でも、多くは、旧宗主国の言語から出発した人々である。それらの人々にとって、いろいろ言ったところで、『～文学』は実体としては自明のものである場合が多い。従って、民族性を本質化する立場になくとも、「普遍が不在であることの普遍」を考えることはそ

う多くはない。

「どの言語で書かれていても、世界中の誰にでも面白い文学」が普遍的な文学であれば、《～文学》というラベルは不要で、限定詞なしの文学と世界文学が等号で結ばれるのかもしれない。しかし、実際には、モンゴル人にとって面白い文学作品が、他の言語文化に生きる人には必ずしも面白くないし、他の言語文化に生きる人々が新奇な作品だと思うものもモンゴル人にとって面白いものではない。一方に厳然と「世界文学」というものが存在して、日本で人気の高い司馬遼太郎の作品は、いくら日本政府が後おしして翻訳しても、「世界文学」たり得ないし、モンゴルでも人気がない。世界性は、結局、生活世界と言語の関係性に帰する文化的コンテクストの通用性である。

2009年秋、出版されたばかりのリグデン著『地球宣言 大草原の偉大なる寓話』（2009年、教育史料出版会）の訳者ブレンサイン氏に日本モンゴル文学会への参加を乞い、話をしてもらった。その折、「本来、文学研究者ではない者がこうした作品の日本語翻訳に携わらねばならないのは、日本のモンゴル文学関係者の怠慢ではないだろうか」という意味の苦言を呈された。その批判をわれわれは真摯に受けとめねばならないだろう。文学の翻訳は、当該作品を文学たらしめているなんらかの文学性を文化的に翻訳し得てはじめて翻訳として通用する厄介な仕事である。日本語とモンゴル語は文法上の統語面で表面上よく似ている。単語を置き換えるだけでも、一応、訳文らしいものはできあがってしまう。しかし、その段階では、文学作品の翻訳とは言えない。正直なところ、ブレンサイン氏の指摘通り、日本モンゴル文学会のメンバーなら、依頼されてもその仕事を引き受けなかった可能性は高いかもしれない。文革時代の歴史資料として、イソップの言葉を政治的に翻訳するということではなく、内モンゴルの知識人が文学でしか表現し得ないと感じた何かを日本語の文学として届けねばならないと思うからである。これは、内モンゴルに限っての特殊な事情だけではない。モンゴル国文学史上不朽の名作、B.リンチェンの『曙

光』を外国語に訳して、その翻訳を文学と感じさせるだけの力量のある者は、日本人に限らず、モンゴル語を母語としない各地のモンゴル文学研究の碩学の中にも、あまりいそうにない。

一般に、《～文学》の立場には常に大いなる葛藤がある。《～文学》の固有の文学性を主張すると同時に、《～文学》が世界性をもつ（支配的な生活世界での「普遍性」、「世界文学」との一致を保障する）ことを示さねば、《～文学》は、普遍的な「文学」として他に認められないからである。2003年、『モンゴル文学への誘い』^{いざな}（明石書店）を出版するにあたって、リスクをとっても、翻訳だけでなく研究論文を付した形での出版を決断した理由もそこにあった。そして、今回、『モンゴル文学』という学術雑誌が、研究論文の発表の場だけでなく、文学作品の翻訳発表の場として設けられた理由もまたしかりである。

矛盾しているようだが、われわれは、「モンゴル文学がその固有の文学性を主張しつつ、世界中の人々にとって面白いものでもあり得る」という可能性に賭けてみたいのである。

いつの日にか、この『モンゴル文学』誌に、馬の乗り方も知らない21世紀生まれのモンゴルの詩人や小説家の作品と並んで、『曙光』の美しい日本語訳が掲載されるだろう。『モンゴル文学』創刊号の頁をめくりながら、そんな風に想像してみるのも悪くないと思う。